



## し 指もんはなぜ人<sup>ひと</sup>によってちがうの

### し 指もんの形<sup>かたち</sup>は親<sup>おや</sup>から子<sup>こ</sup>へと伝<sup>つた</sup>わります

し 指もんの形<sup>かたち</sup>は、親<sup>おや</sup>から子<sup>こ</sup>へと遺<sup>いでん</sup>伝<sup>おほ</sup>することが多く、親<sup>おや</sup>と同じ形<sup>おな かたち</sup>の指もんを、多くもった子<sup>こ</sup>どもが生まれたりするといわれています。しかし、遺<sup>いでん</sup>伝<sup>おほ</sup>するといっても、子<sup>こ</sup>どもはお父<sup>とう</sup>さんとお母<sup>かあ</sup>さんから、それぞれその特徴<sup>とくちょう</sup>を遺<sup>いでん</sup>伝<sup>おほ</sup>しているわけなので、お父<sup>とう</sup>さんやお母<sup>かあ</sup>さんと、まったく同じ指もんの形<sup>おな し</sup>や、指もんのならび方<sup>かたち</sup>をしているわけではありません。そして、そのお父<sup>とう</sup>さんやお母<sup>かあ</sup>さんも、それぞれ、お父<sup>とう</sup>さんやお母<sup>かあ</sup>さんから、指もんを遺<sup>いでん</sup>伝<sup>おほ</sup>しているわけですから、似<sup>に</sup>ていても、少<sup>すこ</sup>しずつちがう指もんの形<sup>し</sup>や、指もんのならび方<sup>かたち</sup>ができていくのです。よく、「まったく同じ指もんはない」といわれるのは、そのためです。

### し 指もんが教<sup>おし</sup>えてくれること

て 手の指<sup>ゆび</sup>にある指もんは、何<sup>なに</sup>かをにぎったりつかんだりするときの、すべり止<sup>ど</sup>め<sup>やくめ</sup>の役<sup>やくめ</sup>目<sup>め</sup>をしているとする説<sup>せつ</sup>もあります。指もんの形<sup>かたち</sup>には、波<sup>は</sup>状<sup>じょう</sup>のものやうず<sup>じょう</sup>状<sup>じょう</sup>のものなどがあり、それぞれの指もんの、みぞの深<sup>ふか</sup>さやはばは、おとなになると大き<sup>おお</sup>くなりますが、指もんの形<sup>かたち</sup>やならび方<sup>かたち</sup>は、生<sup>い</sup>きている間<sup>あいだい</sup>一<sup>いっ</sup>生<sup>しょう</sup>変<sup>か</sup>わりません。

それぞれの指<sup>ゆび</sup>の指もんの形<sup>かたち</sup>とならび方<sup>かたち</sup>は、人<sup>ひと</sup>によってすべてちがうため、個<sup>こ</sup>人<sup>じん</sup>を、本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>にその人<sup>ひと</sup>であると判<sup>はん</sup>断<sup>だん</sup>するの<sup>り</sup>に利<sup>り</sup>用<sup>りよう</sup>されています。（監<sup>かん</sup>修<sup>しゆ</sup>・保<sup>ほ</sup>志<sup>し</sup> 宏<sup>ひろ</sup>）

